

## 論文審査の要旨

報告番号	甲第2885号	氏名	椿田 健介
論文審査担当者	主査 教授 弘中 祥司 副査 教授 中村 雅典 副査 准教授 菅沼 岳史		
(論文審査の要旨)			
<p>学位申請論文「Factors affecting the selection of denture adhesive or oral moisturizers by wearers of maxillary complete dentures」について、上記の主査1名、副査2名が個別に審査を行った。</p> <p>本研究では、上顎全部床義歯装着者を対象に、安定剤と保湿剤を使用させ、その選択基準に影響を及ぼす因子を明らかにすることを目的とした。安定剤と保湿剤のそれぞれの使用感（使用後アンケート）と最終的に何を使いたいか（最終アンケート）を調査した。使用後アンケートの結果から、安定剤は「安定」「咀嚼」などで有意に高評価であり、最終アンケートで安定剤を選択した被験者は14名、保湿剤を選択した被験者は11名であった。この2群を比較したところ、安定剤の選択者は安定と違和感の、保湿剤選択者は乾燥感の評価が高かった。以上の結果から、安定剤と保湿剤の選択には、使用した際の安定、違和感、乾燥感が関与することが示唆された。</p> <p>本論文の審査において、副査の中村委員および菅沼委員から多くの質問があり、その一部とそれらに対する回答を以下に示す。</p> <p><b>中村委員の質問とそれらに対する回答：</b></p> <p>1. 各保湿剤の特徴は何か。  (ジェルタイプの保湿剤は、中等度から重度の口腔乾燥症の患者に向いている。粘性を増すために増粘成分が添加されており、局所に留まる時間が長いため、常時の保湿と持続性が高いという特徴がある。スプレー及びリキッドタイプの保湿剤は比較的軽度の口腔乾燥症の患者に適している。湿潤効果はジェルタイプよりも劣るが、携帯に適し簡便に使用可能である。)</p> <p>2. オーラルフレイル患者に保湿剤を使用することを最終目的にするとするならば、どのような保湿剤の開発が必要であると考えるか。  (オーラルフレイル患者、入院患者や寝たきりの方など口腔内の清掃状態が悪く、口腔ケアを必要とし、義歯装着患者の義歯粘膜面に安定剤を一度使用すると除去が困難であり、安定剤が残存すると細菌の温床となり、粘膜に異常を生じる可能性がある。これらのことから、保湿剤が安定剤を使用した時の同等の維持力とある程度の粘性、長期的な保湿力、抗菌力を有することにより、義歯の脱離と口腔乾燥症や感染症の予防に有用であると考え。また、機能的なことはもちろんのことだが、製品の味、使用感や乾燥感、安定や適合など患者が満足できるものを開発することが重要である。)</p>			

#### 菅沼委員の質問とそれらに対する回答：

1. 使用後アンケートの統計処理方法はどのように行ったか。

(使用後アンケートは Furieman 検定を行った。良いから悪いまでの 5 段階で評価し、各評価段階を数値に置き換え統計処理を行った。)

2. 安定剤と保湿剤選択者の各介在液使用時の維持力に差は認められなかったが、主観的評価において安定剤と保湿剤を選択する要因との関係性は何か。

(安定剤・保湿剤選択者の各介在液使用時の維持力の結果に有意な差が認められなかったのは、本研究の被験者はリコール中の患者で、義歯の適合に問題なく、担当医が経過良好と判断した義歯を用いていることから、有意な差が認められなかったと考える。最終アンケートの結果では安定剤を選択した被験者は違和感と安定の項目で、保湿剤を選択した被験者は乾燥感で良好な結果を示した。本来、安定剤と保湿剤は義歯内面の適合が不良な義歯に使用することを目的としているわけではなく、義歯内面の適合が良好な義歯を更に客観的、主観的にも向上させることを目的としている。今回、客観的評価と主観的評価に関係は認められなかったが、義歯の適合には義歯や顎堤の形態、口腔乾燥状態など様々な要因が関係していると考えられるので、今後更なる検査とアンケート項目を増やし、比較・検討を行っていきたい。)

両副査は、上記を含めた質問に対する回答が、いずれも満足のものであることを確認した。

#### 主査 弘中委員の質問とそれらに対する回答：

1. 今回の研究を行った目的は何か。

(入院患者や寝たきりの方など口腔内の状態が悪く口腔ケアが必要な方で、義歯に安定剤を使用している方は安定剤を義歯粘膜面に一度使用すると除去が困難であり、安定剤が残存すると細菌の温床となり、粘膜に異常を生じる可能性がある。これらのことから、短期的な使用ではあるが維持力を向上させ、主観的評価においても満足できるものであれば、口腔保湿剤の使用を推奨できると考える。)

2. オーラルフレイルの定義は何か。

(オーラルフレイルの概念構造は検討中であるが、大きく分けて「前フレイル期」、「オーラルフレイル期」、「サルコ・ロコモ期」、「フレイル期」以上の4つのフェーズ構成されている。具体的には、生活範囲の狭まり及び精神面の不安定さから始まり、口腔機能管理に対する自己関心度の低下を経て、歯周病や残存歯数の低下の徴候が現れる段階を「前フレイル期」とし、口腔機能の軽度低下に伴う食習慣悪化の徴候が現れる段階を「オーラルフレイル期」、口腔機能の低下が顕在化し、サルコペニアやロコモティブシンドロームさらに栄養障害へ陥る段階を「サルコ・ロコモ期」とした。最終的に摂食嚥下機能低下や咀嚼機能不全を伴いながら、虚弱(フレイル)や要介護状態、運動・栄養障害に至る段階を「フレイル期」とした。)

主査の弘中委員は、両副査の質問に対する回答の妥当性を確認するとともに、本論文の主張をさらに確認するために上記の質問をしたところ、明確かつ適切な回答が得られた。

以上の審査結果から、本論文を博士(歯学)の学位授与に値するものと判断した。